

ふみこ句日記

吉川ふみ子著
吉川竹四郎編

2018/5/31

目次

第1章 野仏

第2章 水無瀬

第3章 平成

第4章 母お気に入り句

8

32

60

102

はじめに

母ふみ子が1003句の俳句を残して亡くなったのは、平成九年で二十年が経つ。その間1003句は友人のホームページで閲覧可能ではあったが、残したノートの句日記をこの四月やっと編集にとりかかった。

母の字は崩し字、万葉かながあり、明治生まれだけあって「紙魚」などをフリカラなしで使っているので 苦労した

次の序文は句日記の冒頭の文で、俳句をはじめた動機などが述べられている。

なお文中に編者としてのコメントを挿入した

平成三十年五月

吉川竹四郎

昭和四十八年九月浅野房子さんと三朝温泉への車中、山下光子に会ひ三朝の病院に療養中の大塚さんを見舞う旅だったが 話は吉川美佐姉のすすめにより京鹿子火曜教室に浅野さん 小田澄子さんが入会

九月初旬会に出席した様子だった。私も一か月おくれて 十月よりともかく出句した。

造る書くと言うことには全々自信のない出発だからあまり進んだ気持ちでは」なっかった。以来 もう止めるを繰り返した。美佐さんへの義理を続けていると言った。

そして十八年の年月が過ぎた。納得のいく自分の句句は殆んど無い。

個人で句集を作られた句友も何人があるが 火曜火鏡 合同句集の仲間入りが精一杯のこと、それ以上自分の句を活字にのこすことは考えてもいなかった。けれどここ数年前から句日記として 整理してみようと思い立った。下手、句になっていない句 それでよい。思えばかりでなかなかとりかかれないで 二、三年は過ぎた。

今回 玉造温泉 厚生年金会館 保養ホームに入所 山下さん 悦子さんと合流するまでの一週間 一人の機を得て漸く一頁をかき出し始める。振り返り見る十八年 記憶確かでないももあるが思い出は楽しい。 3・8・26



福岡山下写真館



山下光子さんと

第1章 野仏

吉祥会で大森先生 池永先生と一緒に当尾の石仏を巡りて

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

「草紅葉」兼題 幼き日の思い出

日を浴びてままごとの子や草紅葉

「顔見世」 去年は文友会で顔もせに。今年はただ思い出のみ

顔見世の名残を夢に見しも去年

お隣の浅野まゆみさんかわいい日本髪で

髪結ひて寝ず娘は待つ初詣

相川北通りの家根笹の中で狂い猫

49
・
1
・

48
・
12
・

48
・
10

48
・
8

猫の恋根笹の乱れ昨日今日

49
・
2
・

上京の車中 浜松あたりで遠連山をみて

山の色幾重の果の雪解光

49
・
2
・

野仏の笑ひ在せり曼珠沙華

48
・
9
・
0

「水草生まふ」 兼題 日浅い私には大変むづかしい。ふと一善の車で探梅につれてもらった時
賀名生 だったかそして仁徳陵ところを走ったことを思い出す。

陵の薄陽の濠も水草生ふ

49
・
3
・
0

「春の雪」 兼題 直子さんの縁談がまた立ち消えた。

娘の縁談又もこわれぬ春の雪

49
・
3
・
0

一つの旅を終えるとまた次に心は走る。

花過ぎぬいづこともなき旅心

49
・
4
・
0

「桐の花」 兼題 小森田さんとあわくら荘に 帰りは姫路までバスにした。

山裾の雨に煙れる桐の花

49
・
5
・
0

編者のコメント

母ふみ子は昭和二十五年から、阪急京都線 相川駅前で文房具の店を始めた。その後雑誌 書籍も扱うようになった。二十年頑張ったところは店員に任せて旅行できる余裕ができた。

旅行は、高松女学校のクラスメート、京都女専のクラスメート、文具商の組合からの誘いだった。

寝起きは 相川北通りの家で 家の半分は貸していた。

昭和十九年に長柄から強制疎開で 相川に来た当時は、母。姉三人、私。そして 居候が三人、女中さんの大所帯だったが、姉達のかたづき、私は東京に就職で、母は一人暮らしになった。

私の東京での就職に関しては、母は行動範囲が増えるといって、賛成してくれた。昭和五十年頃は 私はソフトウェア会社に勤めて、妻と子供二人で、世田谷のマンション暮らしだった。

「草の花」兼題どこで得た句かはつきりしない。

野仏の顔かくすまで草の花

49
・
9
・
0

山下さん 小森田さん 青山さん 四人連れ 児玉東洋さんの車で佐多岬 桜島 霧島と廻っていただく。
別れて高千穂の国民宿舎に泊った夜 高千穂神社の夜神楽をみに行く。

夜神東の明りに映ゆる銀杏黄葉

49
・
11
・
0

「炬燵」兼題 一人暮らしの私の句だと浅野さんの御主人がはやす

置炬燵向ふ人なきあで蒲団

49
・
11
・
0

「年用意」丹波から週二回野菜その他を積んで車が来る大塚「きく」の前でとまる。

大塚ののぶ子さんが電話で「丹波よ」と相川の店へしらせてくれる。

年用意丹波男の荷は売れ早き

49
・
12
・
0

小森田さんが名古屋から夕方までに相川へ着く筈になっているのに遅い

友待つに暮色刻々粉雪舞ふ

50
・
1
・
0

上京車窓より。

風ぬくき末黒野鳥群をなし

50
・
2
・
0

私は化粧水は使っていないが ふと出来た句

化粧水掌に冷えのなし春隣

「花曇」野崎詣りをしらの去年だったかと思う。

綿菓子も売れて野崎の花曇

花曇年甲斐もなき物忘れ

この様な軽やかな心に時もある

若やぎて夏来る歌口ずさむ

相川の家の軒に雀がいそかしげに出入りする

梅雨曇出入せはしき軒雀

相川の町の露地風景

花曇年甲斐もなき物忘れ

どこの寺院だったかなー

あらはなるちくり根洗ひ大夕立

「流れ星」この頃誰かが病氣をして心にかかっていた

看る夜の心もとなき星の飛ぶ

50
・
8
・
26

50
・
7
・
0

50
・
6
・
0

50
・
6
・
0

50
・
0
・
5

50 50
・ ・
4 4
・ ・
0 0

50
・
3
・
0

「空蟬」故かんげつ国分寺境内の礎石で遊んだ日をおもいだして
子等去りぬ礎石にならぶ蟬の殻

唐招提寺 観月の夜

大月夜唐招提寺の庭にイッ

「色鳥」山下さん青山さんと越前賤ヶ岳 長浜竹生島の旅

色鳥や朝の湖の小棧橋

「秋惜しむ」小森田さんと笑い乍らの出来たもの

秋惜しむほほ紅少こしさしてみむ

大塚さん「きく」の前に荷をおろす「丹波」のこと

新鮮と我から言ひて冬菜売

相川の座敷の庭に笹子の声がと井上さんからきく

独り居の朝茶の香り笹に来る

「大福茶」我が家は梅毘布茶が毎年のこと大福茶と思っている。

家長の座に心しまりて大福茶

50
・
8
・
0

50
・
9
・
0

50
・
10
・
0

50
・
10
・
0

50
・
12
・
0

51
・
1
・
0

51
・
1
・
0

「野焼き」 あちこちに見る野火に次の命の芽生えを思った。

新らしき命を呼びて野火勢ふ

51
・ 2
・ 0

「春泥」 浄瑠璃寺への柊が浮かんできた。そして遠足の列が眼に入る。

春泥の径つき寺の小門あり

51
・ 3
・ 0

黄帽子水筒どの児の靴も春の泥

51
・ 3
・ 0

高山祭をめざして小森田さん 美佐さん 宮川ひでさんと下呂へ行く。折り悪し雨で宵の「曳別れ」はみることができなかったが車窓より禅昌寺の塔を眺めて

花の奥雨に煙れる塔のあり

51
・ 4
・ 0

小森田」さん 高田さんと妙高々原 穂高 と旅して 穂高の有明松尾寺にて、妙高々原にて

老鷲や御手の茶壺のかたむける

51
・ 5
・ 0

老鷲に唐松林行きにゆく

51
・ 5
・ 0

「落し文」 むつかしい兼題にふと昨年の賤ヶ岳を思い出して

湖見ゆる古戦場道落し文

51
・ 7
・ 0

亡妹貞子が死の近くなった頃梨をしきりにほしがった。梨の頃がくると思い出す。

病妹の欲りし日とあり梨供ふ

51
・ 9
・ 0

京都女専クラス会 九州志賀島 大宰府 柳川巡りにて

鐘楼に屋根草のびて露ふかし
四つ手網死魚の乾けり秋の声

51 51
・
10 10
・
17 17

「晩菊」相川の庭の菊 謡の小川先生のこと。

晩菊のうつろいはじむ白きより

51 51
・
11 11
・
0 0

晩菊やなほ美しくしき謡の師

51 51
・
11 11
・
0 0

耳の治療で大手町病院に通っていた頃

晩菊やなほ美しくしき謡の師

51 51
・
11 11
・
0 0

天満マーチャンダイズあたりにて

秋冷ゆる赤きストビラ散る舗道

51 51
・
11 11
・
0 0

相川の庭の垣をみて。

綿虫の籬越え来て雨を呼ぶ

51 51
・
11 11
・
0 0

西川さん 増田さん と淡路島健和荘泊り 灘水仙郷 若人も森など巡る。

帰途乗船場にて浅利貝を買う。

蛤の潮のしたたり出船待つ

52 52
・
3 3
・
0 0

東横線多摩川鉄橋通過

河原なる飛球の行方風光る

小田さんの案内で山下さんと三人で吉野山へ

吉野山春蘭の店は客呼ばず

相川の畑にて

花弁ゆれ奥より出でし虻の貌

相川の店二階の軒先に燕巣をつくる

燕の子黄ならびの嘴花のごと

あわくら荘に青山さん 西川さん 増田さんと。自然林のほうへ

木苺や山の佛の唇あせて

整くんが寝冷えしていた時

寝冷え子のうつろの瞳絵本散る

「蜜豆」ふとこんなこともあったかな

蜜豆に唇さみし嘘を言ふ

一家の旅今津 海津大崎 竹生島 つづら荘泊り

52
・
3
・
0

52
・
4
・
5

52
・
4
・
0

52
・
5
・
0

52
・
6
・
25

52
・
7
・
0

52
・
7
・
0

八月も終わりに近い つづら荘の前の湖辺にて得た句

湖の色北より深み秋きざす

竹生島真向ふ宿の洗鯉

高野山登山ケールカーの窓より芒を眺めて

登るほど尾花は細し高野道

芒むらの眺めはあちこちに得られた。それに秋吉台の景を重ねて

行けど行けど穂芒波や夕茜

天高し隠岐の草原牛肥えて

霊場の鐘にも和さずけらつつき

小田から頂戴した紫しきぶが大きくなって美しい実をたくさんに。

下枝より褪せて小庭の実むらさき

相川の家で お謡の小川先生御母堂白寿祝い

庭雀床払ひせしふとん干す

白寿祝ぐ願いをこめて羽根蒲団

相川の家元旦の水。若水を汲むにはあらねど。

若水や心新らたに栓開く

双適入選 52・8・0

52・8・0

52・9・0

52・9・0

52・9・0

52・10・0

52・10・0

52・12・0

52・12・0

53・1・0

小田澄子さんの御親類 句友 藤田みや様の訃。

句友の訃夜を沈丁の香のせまり

淡路島への船中よりの景を思い出して

春潮に群れ飛ぶかもめ水尾追ひて

大森先生御他界 城陽大森家を訪ねる

中を開かない門のうちには花ゆらす

門かたく喪の家ひとと花ゆすら

潮騒の丘の花冷学徒眠る

小森田 美佐さんと淡路島行く

城跡の古井戸涸れず苔の花

四国八十八ヶ所札どころ巡拝

桑の実に郷愁ありて札所径

相川蒔田家の告別式だったか

焼香待つ黒幕裾の蟻地獄

53
・
7
・
0

53
・
6
・
0

53
・
6
・
5

53
・
5
・
0

53
・
4
・
0

53
・
3
・
0

53
・
3
・
0

八十八ヶ所霊場巡り（文友会） 最終回さぬき路
杖は本当に持ち帰り

葉鶏頭一筋町の故郷晴れ
結願の杖納め得し鴟日和

相川風景 よく花屋さん狭い路にも立ち入る

花売の残す菊の香路地の朝

郷生の電話だったかなー

口ませし孫の電話や冬すみれ

クラス会佐渡

曼珠沙華島の陵人稀に

一善広島より出張大阪に来て泊る

出張のしげかれ疾かれ牡蠣土産
寄れば逃ぐ子に獅子舞の昂りて

寒餅を切る夜のまど？ 文とろり

旅立ちの鏡に向ふ夏帽子

久々の子に浴衣着せ今宵酌む

53 53 53 53 53
・
10 10 10 0 10
・
0 0 0 0 0

53
・
9
・
0

53
・
12
・
0

53
・
12
・
0

53 53
・
10 10
・
0 0

菜の花名を問ひ問はれ三輪の径

53
・
10
・
0

元旦のお祝い

三代が屠蘇なみなみと三つの盃

54
・
1
・
1

年末相川の店より北通りの家へ帰宅の途中走り出た猫に足元狂い捻挫して佐古整形院で治療

冬蒨や繻帯の足歩を試す

54
・
1
・
0

楽しんで相川の家えは沈丁花を挿し木いた。

すすく成長したかと思うと突然枯れもした。私はその香りがあまり好きでなかった、気になる匂ひだから何とか句材にした。

昂りぬ沈丁の雨音もなく

54
・
3
・
0

啓執や旅誘ひの友便り家族旅行 土柱 阿波池田

54
・
3
・
0

花の下城址碑ひそと休暇村

54
・
4
・
0

さぬき白鳥黒川温泉に糸島さん 増田さんの案内で

山の温泉は音なく春蚊早出でし

54
・
4
・
20

文友会西国三十三ヶ所巡拝 長谷寺にて

草餅に門前町の賑へる

54
・
6
・
0

高田さんに教えられ三年前栗を土に埋めた。何本か芽お出した中の一本がすすくと伸びた。五十七年相川を去る時捨てていくのが惜しかった

実生栗初花咲けり吾も健

54・6・0

冷奴遠き旅より帰り酌む

54・6・0

小森田さんと上田城より別所温泉への旅

落ちるまま実梅の匂ひ城のみち

54・7・16

小森田さんと郡上八幡 井波を訪ねて

城の灯のうるみ郡上の踊更く

54・8・23

新秋や欄間彫る町木の香り

54・8・24

谷底は見えずバス行く山の霧

54・8・24 大島醇子選

高原の駅コスモスの色極め

54・12・0

文友会 西国三十三番 巡礼

結願の梵鐘ひびく峯の秋

54・12・0

相川の家にて

太りゆく大根今日も抜き惜しみ
実むらさき実生をたのむ土かぶせ
青木の実名知らぬ鳥も枝くぐり

新年謡の会

心地よき帯のしまりや謡ひ初め

安藤さん青山さんと淡路島 健和荘で新年を過ごす 渡船のおり

新年の交す汽笛に群れ鳴

村上ぬいさんの急逝

通夜の冷え遺作のばら絵明るきも

出棺す白梅こぼる砂踏みて

相川の家

雨戸くる朝なあさなを踏育つ

菜園の菊菜色よし久の子に

浅野繁雄さんご他界小森田さん入院

青葉して忌ごもる友と病める友

55	55	55	55	55	55	54	54	54
・	・	・	・	・	・	・	・	・
5	4	4	3	3	1	12	12	12
・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	1	0	0	0

小豆島国民宿舎（池田）に集まりて

明易し潮騒近き島の宿

島の雷止みて翼船ましぐら

竹四郎病む

梅雨嵐し離れ病む子をただ祈る

海南林満喜子さん宅を訪ねて

見送られ見返る薄暮白あやめ

海道先生が第一位にとつてくださった

整の昼寝 私のひるね

健やかな孫の寢息やプール焼け

草引きて草の匂ひの手枕寝

あわくら温泉に幡井さんと行く店の決算をすませて

水引の紅ぬれづめに水車

みのり田の道登校のペダル踏む

温泉涼し重き一事を成しとげて

55 55 55
・ 9 9 9
・ 0 0 0

55 55
・ 8 8
・ 0 0

55
・ 6
・ 0

55
・ 6
・ 0

55
・ 6
・ 1

55
・ 6
・ 0

山下さんと退院した小森田さんを名古屋に訪ねて

退院の友いきいきと派手浴衣

55
・
7
・
17

大川一善 安子さんの車で信穂高 木曽濁河温泉

ダム澄める揺れ映りいる合歓の花

双
適 55
・ 8
・ 2

露天湯の一灯淡く月見草

双
適 55
・ 0
・ 3

霊峰の碧に真向ひ秋ざくら

55
・
8
・
4

私の誕生祝として大台ヶ原へ一善安子さんがドライブしてくれた。紅葉が盛りの山々プロ野球日本シリーズ広島優勝のラヂをききつつ

先急ぎつつ仰ぎゆく峯紅葉

55
・
11
・
2

相川の住居

しみじみと語らな白菊活けて待つ

55
・
12
・
0

遠き旅はなやぎ帰り菊を焚く

55
・
12
・
0

枯菊を焚きつつしばし物思ひ

55
・
12
・
0

鉄橋を渡れば小駅片時雨

55
・
12
・
0

黄の翅の止り色増す実むらさき

55
・
11
・
0

天高し施肥よく効きし畑の色

55
・
11
・
0

七草粥

七草の数揃はねど畑の菜を

56
・ 1
・ 0

幡井さんと焼津 学保に庭からの一望焼津港

一望に漁港おさめて梅の丘

56
・ 1
・ 30

浅野房子さんを訪ねて近くの温泉で一夜を

春炬燵尽きぬ話の果は伏し

56
・ 3
・ 0

春の冷え別れて一人立つ小駅

56
・ 3
・ 0

安子さんが井高野の手伝いを止めることについて一善の言い方処置に納得が出来ない
筋の通らないことに妥協出
来ない私の性

争ひてふと空しかり梅の闇

56
・ 3
・ 0

飯田知子短大入学祝い

合格の祝袋は字も太く

56
・ 3
・ 0

相川家

摘みし落独りの厨たのしかり

56
・ 4
・ 0

散る桜庭の胸像ただ黙し

56
・ 4
・ 0

武具飾る子は父となり遠くあり

真鍋先生の鮎のこと 市原さんのご主人の釣りのこと

解禁の夕べたまはる吉野鮎

釣りし鮎川に戻して春の風

上京車中

富士聳ゆ裾野の町の鯉のぼり

養老の滝へ

滝水をコップに汲みて喉しまる

相川地藏まつり

御詠歌の流れへいそぐ地藏盆

児玉正志さん急の来客

枝豆に酌みて不意なる遠き客

市原さんご夫妻の釣り

釣る夫の片辺に妻の秋日傘

56	56	56	56	56	56	56	56
・	・	・	・	・	・	・	・
10	9	8	7	0	5	5	4
・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0	0

$$\begin{array}{cccccccc} \begin{array}{cc} 56 & 56 \\ \cdot & \cdot \\ 11 & 11 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array} & & \begin{array}{ccc} 56 & 56 & 56 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 11 & 11 & 11 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \end{array} & & \begin{array}{cc} 56 & \\ \cdot & \\ 11 & \\ \cdot & \\ 0 & \end{array} & & \begin{array}{ccc} 56 & & 56 \\ \cdot & & \cdot \\ 11 & & 10 \\ \cdot & & \cdot \\ 0 & & 0 \end{array} & & \begin{array}{cc} 56 & 56 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \\ \cdot & \cdot \\ 24 & 22 \end{array} \end{array}$$

踏み惜しみつつ鎌倉の銀杏黄葉

師走の姿

ウインドに背まるく映る師走町

直紀 年末相川にきて手伝ってくれる

晦日そば孫の食べざま頼もしく

上京
成城の家

窓の梅ほころびゆくをみるしじま

散り梅のかかり濯ぎのもの乾く

八百様を訪ねて

春遠しこもれる叔母に京の菓子

海南の林さん受験（阪大）で泊まる

受験生泊めて祈りを同心に

相川の橋より

日脚伸ぶ中洲に群れる鳥の白

路の臺焼みその香の朝厨

$$\frac{56}{11} \cdot \frac{11}{24}$$
$$\begin{array}{r} 56 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 56 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{cc} 57 & 57 \\ \cdot & \cdot \\ 2 & 2 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

57
.
2
.
0

57
.
3
.
0

57
.
3
.
0

57
.
3
.
0

仲塚の案内 垂水神社

散る花の流れゆくあり踏まるあり

57・4・0

郷生と小田原城

天主より振る手呼ぶ声花の中

57・4・0

相川の畑の垣越し中島さんのお嬢さん

葱坊主垣越しの子はよくしゃべる

57・5・0

耳遠く笑顔で応ふ木の芽雨

57・5・0

一善 安子さんと早発して青山高原にドライブそれは伊賀上野方面への再ドライブだったその数日前 室生寺に之も早朝出かけてたぐさんの写真を撮ったつもりが、カメラはフィルムが入っていなかった。わざわざ伊賀上野百合子宅まで訪れたのに 室生寺門前で草餅を買う 時間はまだまだ昼前 大野寺で昼弁当をいただき相談は急に伊賀上野へ

草餅にふと道変へて娘に急ぐ

57・5・0

小汐さん 増田さん 伊藤さんあわくら荘より鳥取砂丘 磨? 寺へ

直ぐ消ゆる足跡砂に五月旅

57・5・0

風光る砂丘を踏めば若返る

57・5・0

石段のあえぎに著我の花やさし

57・5・0

57
.
8
.
0

第2章 水無瀬

水無瀬に移り来て

秋風も他人もやさし移り住み

見捨てかね新居に挿せり倒れ菊

幡井さんと山代温泉国家公務員保養所

寛ぎて見る山荘の紅葉濃し

水無瀬相川通勤 相川の駅のホーム

乗りおくれくやしき顔に冬の月

水無瀬の日々

寒椿にぶる起ち居のすべもなく

友呼ばむ一人に余る日向ぼこ

57	57	57	57	57	57
・	・	・	・	・	・
12	12	11	11	11	11
・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0

編者注

母は相川の家を処分して、阪急京都線の水無瀬駅前のマンションに引っ越した、

そして相川の店字へは 電車通勤をした。この頃 謡を吹田の小川先生に習いだした。

母は一人暮らしといっても、相川の近くの井高野に甥の和彦一家が支店をだしていたり、相川の店には 細井さん一家が親切にしてくれて 寂しいことはなかった。

友の情雨に摘みきしわらび飯
忌に集るしのぶ日がなを花の雨

水無瀬楠公通の大楠像が学校庭に移し植え

除り去らる囀り包む街の樹が

読むも憂し眺むも憂しや花の雨

集ればお国訛よよもぎ餅

秩父路 高松高女の皆さんと

秩父路につづく芽桑の夕映えて

一善と一言神社へ

万緑や一言神に願一つ

田植機の若者帽子に赤い花

文友会 東北の旅

桜桃たわわの国へ喜寿の旅

西川さん 水無瀬に迎えて

杖たよる友出迎へに梅雨はげし

58
・
6
・
11

58
・
5
・
0

58 58
・ ・
5 5
・ ・
0 21

58
・
4
・
7

58 58 58
・ ・ ・
4 4 4
・ ・ ・
0 0 0

58 58
・ ・
4 4
・ ・
0 0

水無瀬

朝涼し咲きつぐ花を供華日記

引き越して来たる浜木綿咲き安堵

娘三人訪ひくれ風鈴よく鳴れり

一族の年長となり魂まつる

阪急32番街 皆美にて、竹四郎 喜美子と食事

動かぬ灯動く灯一望盆の果

洗ひ髪立つベランダの風は秋

山下さん 高田さん 駒ヶ根車山ペンシンググリーンスポット巡り

蕎麦三日食べてさわやか信濃旅

安藤さんと三方五湖

色鳥や岳に真向ふ湖の宿

大きな鳥湖上を舞ひて夏去れり

箕面観光ホテル別館 桂 謡に会

庭紅葉もえて謡に力声

謡ひ果て山荘黄葉をのこし暮る

58	58	58	58	58	58	58	58
・	・	・	・	・	・	・	・
11	11	9	9	9	8	0	0
・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	4	0	0	0

水無瀬折々

翅やすむ蝶もむらさき式部の実
独り居のよき日淋し日菊挿して
疎く住み安けき日々や杜鵑草

成城の金魚

屑金魚育ち掬ひし児も少年

伊藤さん八田さん清川さん 京都の紅葉案内

案内三日京の紅葉に酔ひ疲る

照紅葉京一望の峯の寺

高田さん宅に小森田さん 小田さんと 山荘和周庵 落成

山荘の集ひに菜飯冬ぬくし

冬入日竹叢透し荘なごむ

水無瀬元旦

一とせを会ひ得ぬ人の賀状増し
しきたりをつづけて独り屠蘇機嫌

59 59
・ 1
・ 1
0 1

58 58
・ 12
・ 12
9 9

58
・ 11
・ 0
0

58
・ 11
・ 0
0

58
・ 11
・ 0
0

58 58 58
・ 11
・ 1
・ 0
0 0 0

安藤さんと三方五湖へ北陸線

トンネルを抜ける度雪深くなり

水無瀬のシンビジウムがさく

ただいまと灯せば応ふ室の花

水無瀬に石井晴美さんを迎え？ 　る枝の友

ちゃん呼びで遠き日戻る木の葉髪

富田の駅で乗り換えの時 　相川の古いお客様と出会う

春寒やぱったり出会ひ出ぬ名前

直紀 郷生 一善に質問されて

争ひも夢よ首塚土筆の芽

防府 藤本悦子さん宅 　（藤本様とはこれが最後の出会いになる）

老夫婦夜をぼつぼつとひなあられ

山下さんと湯布院 　亀の井 別荘二泊

雪解風由布岳さして大鴉

59
・
3
・
5

59
・
3
・
3

59
・
3
・
0

59
・
2
・
0

59
・
2
・
0

59
・
2
・
0

59
・
1
・
2

水無瀬折々

土を割る花芽それぞれ色ありて

によきによきと花芽ラツシュの庭の土

花苺児にしやがみ見す苺の粒

朝毎の独りに足りる庭苺

団地住みテレビの上の兜の威

ホース先そらせばそこも青蛙

水無瀬の庭の青蛙はなつかしい お隣佐藤さんに嬰誕生

花南天隣初嬰の襁褓干す

待ちつつも一人を涼しと思ふ日も

庭茂り払ふ枝にもある生命

孫の名をとりちがえ呼ぶ盆家族

夏萩に誰みくじ結ふ禁よそに

悦子さん宅へ弔問

忌ごもりの友訪ひて汨つ戻り梅雨

山下さん 小森田さん と小海線から草津野友湖

夏書終へ東塔西塔仰ぐ朝

59
・
9
・
0

59
・
7
・
0

59
・
8
・
0

59
・
8
・
0

59
・
8
・
0

59
・
8
・
0

59
・
7
・
0

59
・
7
・
0

59
・
5
・
0

59
・
5
・
0

59
・
4
・
0

59
・
3
・
0

59
・
3
・
0

空と無の多き夏書や朝鴉
りんどうや標高識のたつ小駅
高原列車おそしとゆれる花すすき
紫の小波たてり松虫草
思はざる遠富士すゝきの小窓より
満藤さん宅 のうぜん花
朝風に彩をひろげてのうぜん花
上野城 百合子出品を見に行く
風涼し天主の床の黒光り
俳聖殿忍者屋敷も蟬しぐれ
道成寺「白浜三段壁」
秋涼し絵とき説法に笑ひあり
水軍の洞の跡や秋の潮
水無瀬盆踊り
青い眼の手ぶりに見入る踊の輪

59	59	59	59	59	59	59	59	59	59
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
8	9	9	8	8	9	9	9	9	9
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	19	19	0	0	0	0	0	0	0

諷刺歌踊りの櫓は高調し
送り火やもとの一人に戻る夜

直紀の成人に感じたこと

帰省子の言葉大人ひとふと淋し
若者となるは別れか鳥雲に

箱根？ 保にて

夏霧の湧きて流れて山の湖

小川先生宅の山茶花

山茶花の垣咲き始めぬ謡声

吉川三郎さんを高槻の病院に見舞う

冬の雲まこと知らせぬ人見舞ふ

水無瀬年忘れ

年忘れ流す憂さなきワインの香
賀状書く亡母の字に似る母の年令
寄せ鍋の沸々はずむ故郷ことは

59 59 59
・
12 12 12
・
0 0 0

59
・
11
・
0

59
・
11
・
0

59
・
7
・
0

59 59
・
8 8
・
0 0

59 59
・
8 8
・
0 0

春や憂し着かえし裾の静電気

割れ込まれ句心とぎれぬ春炬燵

初蕨(わらび)雨に持ちくれ留守の扉に

名にひかれ植え初花をひめ辛夷

伊藤さん 清川さん と岩国城

天主より眺むる花の城下町

階高し一打の鐘に花の散る

小汐さん 伊藤さん 清川さんと鳳来寺

老鶯に耳あそばせて喜寿の足

三日月

蝸牛わがもの顔に城跡の碑

あわくら荘に集まりての帰り道 あわくら溪谷

ぶちぶちと峠に摘めり夏わらび

木苺の酢っぱ甘さや溪流に

水無瀬 庭に年々の青蛙

塗るかへて狭庭の客に青蛙

60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
5	6	6	5	5	4	4	4	3	4
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	17	18	8	9	21	21	0	0	0

成城の家より駅に出る道

花ざくろ・

小田澄子さん逝く。小田さんからいただいた紫式部

御名のごと清らに生きて蓮花

たまはりし紫式部さわ咲けど

短夜や句机ならぶ夢の切れ

水無瀬

夜濯ぎて一日終りぬ恙なく

働けることの幸玉の汗

言ふだけで気のすむ愚痴に団扇風

階暑し団地こつこつセールスマン

60年双適出句

梅雨しめる記帳簿將軍旧居訪ひ

苔の花將軍愛馬の小さき塚

60	60	60	60	60	60	60	60	60	60
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
6	6	9	8	8	8	8	8	6	6
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
25	25	0	0	0	0	0	0	0	0

將軍旧居もちの花
意を通し過ぎし淋しさ夏の蝶

入選
60・60
0・6
0・25

小森田さんと山中温泉 和倉に

小駅の時計おそしと思ふ時雨来て

60・11・19

一駅まちがえて芦原温泉にて下車

名もゆかしこほろぎ橋の溪紅葉

60・11・20

冬の雷一発のみや・

60・11・20

高田さん見舞い

冬ぬくし見舞ひし友にもてなされ

60・12・0

小川先生宅

謡声白山茶花の垣流れ

60・12・0

落ち葉を眺めて

小説の終りのごとく落葉散る

60・12・0

熱海伊豆山神社にて

愛語りし腰掛石や昼ちちろ

曼荼羅に政子のむかし秋そぞろ

露けくて墨のうすれしいわれ書

水無瀬正月風景

輪飾りの小さきをかけ団地の扉

寒木瓜の紅を深めて雨上る

盆梅や鉢の木謡ひたき夜なり

成城にて 直紀背広 成人の日ではなかったが、くにの入試日

成人の日の背広着し子を見上ぐ

試験子の窓に憂きほど春深雪

伊藤さんの長男様御他界

弔ひて無口の歸り春吹雪

田辺齒科

ことなげに抜歯をされて春寒し

$$\begin{array}{r} 60 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 60 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{r} 60 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

61
.
1
.
0

61
.
1
.
0

61
.
1
.
0

61
.
2
.
0

61
.
3
.
0

61
.
2
.
0

61
.
3
.
0

身も心青く染まりぬ宮若葉
山越ゆるあの辺野崎か花曇

山下さん小森田さん悦子さんと島原 雲仙 平戸

バスの窓遠見を塞ぐ栗の花

蛇の衣板一枚の城跡文

アイスクリーム売の熱弁落城譜

蔦青し城見ゆ坂のオランダ堀

青葉冷え天主の跡の落城譜

足の痛みが始まって 水無瀬

踊太鼓すぐそこにきき足を病む

山男めきひげ面の帰省孫

癒ゆること信じてきけり蟬の声

癒ゆきざししかと涼しき今朝の風

亡母の櫛ふとさしてみる盆支度

杖に頼る試歩の足もと萩こぼる

井高野で泊って

寝団扇にうちわどころの故郷のこと

61	61	61	61	61	61	61
・	・	・	・	・	・	・
9	9	8	9	8	8	8
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0

61	61	61	61	61
・	・	・	・	・
0	6	6	6	6
・	・	・	・	・
0	15	14	14	13

61	61
・	・
4	5
・	・
0	0

遠藤さんちの手紙が行きちがいになること三度

去ぬ燕便りとたよりすれちがひ

山下さんと形見の交換 木目込ひな 日本の国立公園

鰯雲交しておかむ生き形見

水無瀬

風に雲に秋の深みを知る夕べ

カタカナ語事典にいとむ老夜長

菊の香や来し方遠し五・

雲を割り冬陽美し退職す

むなしさも煙としたり菊を焚く

年用意心のこもる故郷の荷

伊藤さんと花の寺へ

満目の紅葉それぞれがふ色

井上直子さんと箕面観光ホテルにて越年

静かなりで湯娘と在り去年今年

安藤さんと文楽 謡新年の会 堀田様宅

62
・
1
・
1

61
・
11
・
15

61
・
12
・
0

61
・
11
・
0

61
・
11
・
0

61
・
9
・
0

61
・
10
・
0

61
・
10
・
0

61
・
10
・
0

61
・
9
・
0

鵠沼地鎮祭

花クローバ終の棲家の地鎮祭

鎌倉文学館

松の花傘寿を集ふ公の庭

文学館出でてまぶしき若葉光

相川 三国さんへの日々

目礼がことばよ通院路の茂り

山下さん伊藤さん悦子さんと長崎 天草 熊本 阿蘇

青葉雨千人塚の匂ひ濃し

土産店菖蒲と競ふ肥後名所

五月晴阿蘇の寝釈迦に帰途祈り

伊藤さん清川さん」と寄居少林寺五百羅漢

夏草に五百羅漢のかくれんぼ

夏草にあそびつ羅漢の泣き笑ひ

くに 自転車信州の旅を

自転車で五日の旅の戻り梅雨

62	62	62	62	62	62	62	62
・	・	・	・	・	・	・	・
7	7	7	5	5	5	5	5
・	・	・	・	・	・	・	・
0	9	9	26	28	27	0	0

水無瀬

初咲きの桔梗と供華に朝づとめ
夜濯ぎの干場思はず下手な歌

大和桜ヶ丘のマンション

八階に住みて音なき遠花火

山中湖健保に泊りて 山下さん清川さんと

早発ちてさかさ富士みむ秋の湖
霧晴れて小波が消すさかさ富士
文学碑たてる峠に秋の富士

下呂禅昌寺駅

花すゝき駅近かそうで遠かりし
招くごとコスモス揺るる無人駅

水無瀬

誰も来ずくつろぐ時の菊日和

老夜長旅に集めし箸袋

62	62	62	62	62	62	62	62	62	62
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
10	10	9	9	9	9	8	8	8	8
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	4	4	0	0	0	0	0	0

水無瀬に児玉正志さんを迎えて

とつておきのワインもてなす良夜かな

南洲を語る白髪月の部屋

鹿教湯温泉へ

紅葉濃し峠二つを越えし温泉

鵜沼にて

我が家と隣家を置き換えてみた

隣より争ひ声や秋の暮

鵜沼稲荷に沿って裏へ

石路さかり先は稲荷の鳥居径

竹四郎チロとの散歩

海知らぬ犬を毎朝冬の浜

新らしき木の香の中に賀状書く

百合子の看病の日を思ひ

62	62	62	62	62	62	62
・	・	・	・	・	・	・
12	12	11	11	11	10	10
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	19	0	0

看とりつつ句帳かた辺に長き夜
看とり女にある秋晴や特選句

編者注

百合子が夫栄介の看病で

「点滴の窓を祭りの鉾過ぎる」

が伊賀上野の句会で特賞に選ばれた

祭太鼓看とりの窓に遠くきく
安眠なき看とりの夜々に虫親し

伊豆山神社

愛語りし腰掛石や昼ちちろ
露けしや墨のうすれしいわれ書
曼荼羅に政子の昔秋そぞろ

飯田知子婚約

寒青空娘は頬染めて婚約を
梅二月婚約成りし娘のまぶし
婚近き娘と春いちご分ちあい

新刊線車中 小林ふじさん思

列車徐行深雪のここに友住ふ

63
・
3
・
0

63 63 63
・ ・ ・
3 2 1
・ ・ ・
0 0 0

62 62 62
・ ・ ・
10 10 10
・ ・ ・
0 0 0

62 62
・ ・
10 10
・ ・
0 0

62 62
・ ・
10 10
・ ・
0 0

水無瀬

たまわりし手造り味噌に露のとう

三号棟福井へのマンションの路

枯芝にねてにらまるゝはらみ猫

春寒や三日もつづく探しもの

手袋紛失 カーペットの下に隠れていた

春灯失せものこゝに出て笑ふ

椿落つ今日も名知らぬ鳥の来て

大川夫妻と長浜盆梅展

ゆかし名ばかり揃えて盆梅展

宇高連絡船の名残

春潮に水尾ひく連絡船（ふね）のあと幾日

終航の間近かき名残瀬戸の春

美佐さん 西田さん 水無瀬に

63	63	63	63	63	63	63
・	・	・	・	・	・	・
3	3	2	3	2	2	0
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0

花菜漬土産に訪ひくれ京言葉
手染めとて淡き春着の京言葉

黒塚

花冷えて鬼女の棲みける巨き岩
恐ろしき昔語りや花の里
杉古りて黒塚ひそと花曇る

鹿教湯より美ヶ原 美鈴湖

若やぎて傘寿の集ひ牡丹園
声低く僧が餅売る牡丹寺
手をとりにて笑む道祖神若葉光
花の雨眠る山湖を去りがたく

小汐さん迎え鎌倉へ

老鶯や奥へとたずね政子墓所

旧姓で呼びあふ荘の明易し鎌倉荘

日光百体地藏

63	63	63	63	63	63	63	63	63	63
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
6	6	0	0	0	0	4	4	4	3
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	1	0	0	0	0	22	22	22	0

まぐなぎを払ひ百体地藏訪ふ

箱根

探ねゆく流れ涼しき溪いで湯（太閤の湯）

カンナ燃えひしめきあえる養鶏舎

志賀高原 発哺温泉より東館山

雲走り峯にこま草這ひて咲く

光簡保 山下 山脇 藤本さんと

浜木綿にしばらくのこる夕茜

故郷さぬき国分

故里の植田にうつす己が影

錦飾る故郷ならずも茄子の花

甚平着て今日も碁敵待つ

叔父跡地ひまわり咲かす家五軒

水無瀬 福井さん北海道に転勤

朝顔や一家は北に赴任して

63
・
8
・
0

63
・
8
・
0

63
・
8
・
0

63
・
8
・
0

63
・
8
・
0

63
・
7
・
0

63
・
7
・
0

63
・
7
・
0

63
・
7
・
0

63
・
6
・
0

水無瀬で山下さんと九月旅の終わりにてお別れ

秋蝶が惜しむ別れの前よぎる

見送りの垣根アベリア咲きこぼる

日光明智平ロープウェイにて

滝二つ遠見の台に小手かざし

鵜沼の空き地

穂すすきのみるみる刈られゆく売地

吾が暮し覗いて聞いて青芒

初秋水無瀬駅のホーム

秋と思ふホームに目立つ黒い靴

山下さんとの九月旅

爽かや事終へて発つ旅の朝

大秋晴善光寺平一望に

歌声をのせて寄せ来る芒波

鵜沼引地川遊歩道コスモスの新名所と新聞に出る

63	63	63	63	63	63	63	63
・	・	・	・	・	・	・	・
9	9	9	9	9	9	9	9
・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0	0

コスモスのゆれる川沿ひ遊歩道

知子母となる知らせ

母となる娘に寄す思ひ冬ぬくし

実南天紅し娘は母となる

水無瀬をたたむ決心

晚菊や終止符打たん独り住み

息子と同居決めむ独りの湯豆腐鍋

武生に仏壇を見に行く

トンネルを出て越前の雪景色

仏壇を買ひに越路へ雪清し

昭和六十四年 初詣日向薬師

山ふところに香煙みちて初薬師

初護摩の煙いただき肩かるし

1	1	63	63	63	63	63	63	63
・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	1	12	12	11	11	11	11	9
・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	1	0	0	0	0	0	0	0

第3章 平成

鵠沼の紅梅

紅梅のふふみしことも友へ書く

吉祥会西大寺新年会

大茶盛廻す茶碗に和気あふれ

水無瀬の終わり近づく

寒木瓜の紅流れそう雨つづく

春寒し故なく心のとがる今日

契約のとれてマフラー忘れ去ぬ

水無瀬売却で近鉄不動産の勝木さん

雪ごもり写経の日々と紙便り

1
・
2
・
0

1
・
2
・
0

1
・
2
・
0

1
・
2
・
0

1
・
1
・
0

1
・
1
・
0

児玉正志さん水無瀬へ 東洋さんの帰国をきく
春風や繰り上げ帰国のよき知らせ

水無瀬

引き越しの迫り咲きつぐ春の彩
転宅の別れの集ひ鰯すし

鰯の押しずぬきが作ってみたかったが、本当はできなかった。
鵜沼のご近所の柴木蓮

すましたる貴婦人めける柴木蓮

瀬戸内海の広島」に都築家の墓を一善と共に探して

昼顔や島にたづねる古き墓

瀬戸内海本島の本島荘に政本怜子さんと一泊

夕明りのこる卯波や島に泊つ

道後への旅 松山城にて

城下町一望にほふ栗の花

お天主へ石垣高し松の花

天主閣仰ぐ茶店の藤こぼる

1 ・ 4 ・ 25	1 ・ 4 ・ 25	1 ・ 4 ・ 25	1 ・ 4 ・ 30	1 ・ 4 ・ 30	1 ・ 4 ・ 0	1 ・ 3 ・ 0	1 ・ 3 ・ 0	1 ・ 2 ・ 0
------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

鵜沼引地川沿い

紫陽花の彩 拈げゆく遊歩道

鵜沼の家留守居

夏三つ葉雨の小やみに摘む留守居

井高野 多香子 香代子

母も娘もショートカットにさくらんぼ

鵠沼

窓開き大向日葵に見つめらる

驕りても向日葵は好き美しくしき

私の部屋から向かいの空き地のひまわり

留守居して一人に惜しき風涼し

水撒きて陶狸うれしき顔となる

思ひきり水撒き散らす重きもの

賞め言葉裏に返さず花クローバ

佳子先生の誉め言葉素直にうれしく思う

水撒きて木々と話をする留守居

白粉花空家となりし垣に満つ

1
.
5
.
0

$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 6 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

1
.
6
.
0

$$\begin{array}{cc} 1 & 1 \\ \cdot & \cdot \\ 7 & 7 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

1
.
7
.
0

1
.
7
.
0

1
.
7
.
0

1
.
8
.
0

$$\begin{array}{c} 1 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

病葉のこの量踏みて医に通ふ

奥医院への道 遊歩道

一善 安子さんと竜神十津川の旅

鳶舞ふ高野の夏の深き空

野猿乗り夏の河原の若者等

グラヂオラス店の娘明るく迎へくれ

龍神の食堂

ボンボンダリヤ活けて村営コーヒー館

山下さん 清川さんと南紀に

漁火に想ひそれぞれ宿浴衣

新大阪駅恵美子ちゃんに送られて

盆列車着席までを送らるる

山下さんと田沢湖へ

伝説の湖ははるかに芒原

湖も山もみるみる消えて霧の海

山の霧流れて速し湖生る

1
・
8
・
0

1
・
7
・
0

1
・
7
・
0

1
・
7
・
0

1
・
7
・
0

1
・
8
・
0

1
・
8
・
0

1
・
9
・
0

1
・
9
・
0

1
・
9
・
0

蔵王スカイライン

のぼり来て賽の河原の細芒

伊豆 戸田 NHK青春家族のホテルにて

旅に訪ふドラマ舞台の町も秋

荒井シズさんに荒井ツヤさんの写真を中央林間で手渡す

久の出会い杖目じるしと言ふも秋

鵜沼

秋釣の成果に夕餉賑へり

秋雨のやまず留守居の夕仕度

忍野八海がたまらなつかしい 一昨年の五胡めぐり

コスモスの身丈を埋めてはるか富士

湧き水の秋澄む池に富士の影

塩原

天高し誕生釈迦の細き指

落葉かき風に根気の作務の僧

1	1	1	1	1	1
・	・	・	・	・	・
10	10	10	10	9	9
・	・	・	・	・	・
29	29	0	0	0	0

鎌野さんより柿いただく

柿届く家なき故郷の友も老ひ

郷言葉の電話果なし老夜長

山下さんと箱根へ

命延ぶ泉いただき峯を越す

野仏の膝にさい銭紅葉散る

紀州の旅を思い出したて浜木綿荘の朝茶がゆ

冬濤の音きゝ紀伊の朝茶粥

井高野佳代子がたててくれる屏風

娘が立てし枕屏風に安眠して

鵠沼

晚菊に名残水やり旅に出る

報恩講善女となりてしる粉賜ぶ

花車たがへず来たり年用意

心ゆくまで謡ひけり年忘れ

娘の忌日となりて年経る小つもごり

1	1	1	1	1
・	・	・	・	・
12	12	12	10	12
・	・	・	・	・
0	0	0	29	0

1
・
12
・
0

1
・
12
・
0

1	1
・	・
11	11
・	・
6	6

1	1
・	・
11	11
・	・
0	0

路摘みて老の自慢のちらしずし
一心の白夕闇にほのと浮く

陶狸の背出で入る鳥の巣づくりか

悦子さんの事故を憂う

葉桜や友のギブスはまだ除れず

筑後川温泉の旅

露座観音見おろす里の柿若葉

柿若葉光る白壁つづく里

風薫る河童出そうな筑後川

竹原簡保

老鷺に迎えられけり峡の宿

鵜沼

鱧一尾釣りて得意の帰宅ベル

釣りし鱧ほめて一箸つつ廻し

ご協力和酔い甘夏を嫁出し来

箱根の紫陽花

2 2 2
・ ・ ・
6 6 6
・ ・ ・
0 0 0

2
・
5
・
0

2 2 2
・ ・ ・
5 5 5
・ ・ ・
0 0 0

2
・
4
・
0

2 2 2
・ ・ ・
4 4 4
・ ・ ・
0 0 0

紫陽花や登山電車は幾曲がり

高埜西部百貨店 幡井さんと

お世辞とも思ひつつ買ふ夏帽子
夏帽子鏡の顔はややすまし

井高野

のびて寝る猫のかたへに端居して

着荷待つ夕方 新井さんの木樨

待つ荷物おそし木樺はしぼみ初む

鎌倉の御寺涼やか友葬る

井高野 敏夫 悠二と

母として慕はれ甥とビールくむ

風鈴や父母知らぬ甥よき父に

五十年忌終すあの日も秋暑く

みちのくの旅

巨寺にみちのくらしき萩まつり

$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

2	2
.	.
7	7
.	.
0	0

2
.
7
.
0

2
.
7
.
0

2
.
7
.
0

2
.
8
.
0

$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 2 \\ \cdot \\ 8 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

2
.
9
.
0

雨上がり紅たわゝなるりんご園

子に孫にりんご送りて津軽旅

台風もよしといで湯にやり過ごし

東京晩翠会に誘はれて東條会館

久に來し皇居のお濠曼珠沙華

鵠沼

コスモスの風に流せるほどの些事

ただ声をききたく夜長の遠電話

バスを待つこわれベンチに秋の蝶

玉造保養ホームに來て

茫々の芒の中や美人塚

神在月とガイド熱あり出雲路よ

三原仏通寺にて

濃紅葉座禅堂の扉はかたく閉じ

寄進瓦に筆持つひまも紅葉散る

鵠沼

2 2
・ ・
11 11
・ ・
19 19

2 2
・ ・
11 11
・ ・
10 10

2 2 2
・ ・ ・
10 10 10
・ ・ ・
0 0 0

2
・
10
・
0

2 2 2
・ ・ ・
9 9 9
・ ・ ・
0 0 0

庭小春鳩来て犬が少し吠え
晩菊や顔見ぬ電話言ひ過ぎし
枯木してはるか富士見る道となる

平成二年を迎えて

数の子の歯音うれしや八・
初詣極楽寺てふ名にひかれ
初旅や全き富士に真向へり

湯河原厚生年金保養ホーム

立春の陽に勇氣湧きトレーニング
足鍛え眠り覚めたる山のぼる
人波に流されてみる梅まつり

竹原簡易保険保養センター

指呼の山みるみるかくす春吹雪
舞へ狂へいで湯ごもりの春吹雪

井高野香代子の雛壇

ほの酔ひや孫つぎくれしお白酒

3	3	3	3	3	3	2	2	2
・	・	・	・	・	・	・	・	・
3	2	2	2	2	1	12	12	12
・	・	・	・	・	・	・	・	・
0	19	19	0	0	1	0	0	0

ひなの前老も交りて撮る今宵

万博公園の梅林へ多香子香代子につれられて

梅林へ少しの坂も手を引かれ

白梅の古木に希ふ吾が余生

玉造厚生年金保養ホーム

湖見ゆる観音堂の大桜

芽柳の日々に大ゆれ風青し

花散るや石州瓦の光る村

鵜沼 長引いた風邪が漸く治つて

初蝶や癒えて佇つ庭彩ふえて

初蝶やふつつり切れし思ひごと

鵠沼

新茶賜ふ少年今は病院長

芍薬や三度の転居共にして

染め止めて白髪軽し青葉風

$$\begin{array}{c} 3 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{cc} 3 & 3 \\ \cdot & \cdot \\ 3 & 3 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \end{array}$$

3	3	3
.	.	.
4	4	4
.	.	.
0	0	0

$$\begin{array}{cc} 3 & 3 \\ \cdot & \cdot \\ 4 & 4 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$

3	3
.	.
5	5
.	.
0	0

$$\begin{array}{c} 3 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

年令らしく白髪でおしゃれ夏帽子

竹四郎が私の好きなべらを釣ってくる

釣り土産べらとはうれし瀬戸育ち

油布院保養ホーム

早苗田の日毎濃くなる療の窓

山の湖万緑の中遠くあり

寄居簡保に泊る

山間の夏霧深き駅に着く

立葵彩を揃えて山の駅

葉草湯の香りのこりて宿浴衣

大寸の宿衣たぐりて岩魚膳

鵜沼

億の土地我がもの顔に青すすぎ

通院の道は川沿ひ月見草

時計おそし独り留守居の小粒ぶどう

玉造厚生年金保養ホーム

3	3	3	3	3	3	3	3
・	・	・	・	・	・	・	・
8	8	8	7	7	6	6	0
・	・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0	0

$$\begin{array}{r} 3 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

諦めもした犬癒えて冬ぬくし

3
・
0
・
0

独言ならずチロとの話始め

3
・
0
・
0

愛犬のチロも淑気の尾をふれり

4
・
0
・
0

年の夜吾より古き茶棚拭く

3
・
0
・
0

立春大吉吾より古き茶棚拭く

3
・
0
・
0

名水へ凍ての溪路手をひかれ

4
・
0
・
0

謡初帯山小さく装ふ同志

4
・
0
・
0

謡初足のねぢりを許し合ひ

4
・
0
・
0

玉造

保養所で看る東京の雪ニユース

4
・
2
・
0

お返しを気にする老や冬いちご

4
・
2
・
0

大山ははるか田に群る白鳥かな

4
・
0
・
0

家で

旅歸り待ちくれ紅梅咲き満つる

紅梅や吾が色にせむと言ひし亡友

梅の闇逢ふ日約せし友逝きぬ

高松へ

旅はずむ卒業進学祝ぎ二つ

竹四郎と一緒に帰宅新幹線

たまさかの母と息子の旅春の虹

家で

春眠の十指ほぐすつ今日へ覚む

春セーター鏡に肩のうすきこと

美しく老いたきものよ柴木蓮

シクラメン茶の間笑ひ溢れさす

さぬき国分 勝美さんの家で

$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

4
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 4 \\ \cdot \\ 3 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

ふる里はすみれたんぽ墓の径
桃の花さら前かけの辻地蔵

お遍路の憩なる礎石大伽藍

菜の花を手いっばい摘み日毎漬け

日々摘めど菜の花畑の黄は濃ゆく

花杏真白従妹に甘え気味

鵠沼

芍薬の蕾ふくらむ庭の日々

発つ朝にうす紅ほのと花水木

いそいそと半袖えらび旅立てり

玉造

山迫る車窓次々藤の花

若葉風亡妹の友とめぐり逢ひ

短か夜や亡妹の友と泊つ出雲

ビール酌むかちんとグラス若やぎて

ビール酌むドラマのように共鳴し

ビール乾し少し多弁に刻忘る

4 4 4 4 4 4
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0 5
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0 0

4 4 4
・ ・ ・
5 5 5
・ ・ ・
0 0 0

4 4 4 4 4 4
・ ・ ・ ・ ・
4 4 4 4 4 4
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0 0

新涼や試歩の芝生に笑み交す

高階に寝て眺め居り雲の峰

霧にまだ眠る町並試歩はげむ

夏霧の深し湯の町まだ覚めず

吉備路 山下さんと廻る

回廊に沿ふ白萩に清めらる

水攻めの城跡や蓮の実の大粒

家で

苗木より三年無花果三つ熟れる

長生きに想ひいろいろ敬老日

秋灯下親しきものは虫眼鏡

湯河原保養所で

保養所の昼餉にぎやか大秋刀魚

露芝生試歩の目標果し得て

秋日和木椅子に一病話し合ふ

山下さんとの旅

4 4 4
・ ・ ・
10 10 10
・ ・ ・
0 0 0

4 4 4
・ ・ ・
10 9 9
・ ・ ・
0 0 0

4 4
・ ・
9 9
・ ・
0 0

4 4 4 4
・ ・ ・ ・
8 8 8 8
・ ・ ・ ・
0 0 0 0

シャッターを頼む一会や寺紅葉
庭園灯淡きに和せぬ木犀の香

4 . 4
10 .
0 0

双適出句

実梅の香まこと顔して嘘をきく
夜の仏間大蜘蛛打ちて逃がしけり
耳遠く独りもよしと新茶汲む
魂迎ふやがては迎えらるる吾
帰省子に一夜越し方きかれけり

4 . 4
7 . 7
0 0 0 0 0 0

平成四年十一月の京鹿子大会で海道選の佳作に入る

郷生が以前大学受験で大阪府大を受けに来て、水無瀬に泊った一夜のことだった
句材乏しくふとこのことを句にしたもの

私は郷生と語り合った一夜のことはそれ以来忘れられない。
いつも私の心の中で生きている。

きかれるままにくわしく話した。そして最後に

「あばあちゃんはずいぶん苦労したんだねー」と言ってくれた。

以来鶴沼に転居してから、二度ほどずいぶん郷生にひどい事をいわれて泣いた事があるが
この言葉が胸の中にあるのでその腹立ちは直ぐ消えた。

私の生涯で忘れられないうれしい私を励ましてくれる言葉である。

あれからもう六年経った今 これを句にしてみたら海道選に入ったのでうれしい
私の身内で消えることのない大切な温かい言葉である。

帝人箱根山荘 塩見さん 岩田さんと

山荘の富士見ゆ窓に姫りんご

夜霧匂ふ同郷なりし荘の主

家で

天高し無傷の紺を飛機が割る

セーターの赤を鏡に問ふ八・

小松原の奥様から頂戴した手編みのセーターを着て相川で

声高や桜紅葉の女子校道

笹倉にお邪魔して

迎えられ娘の柚子風呂の香りかな

いさかひが笑ひに母と娘の冬至

年用意母と娘の声いづれとも

鵜沼の家で

部屋に冷ゆ胸像の夫に独り言

4
・
12
・
0

4
・
12
・
0

4
・
12
・
0

4
・
12
・
0

4
・
11
・
0

4
・
11
・
0

4
・
11
・
0

4
・
1
・
0

4
・
11
・
0

$$\begin{array}{r} 4 \\ \cdot \\ 12 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

姫こぶし一輪樹下にチロは死す

春嵐おさまる朝にチロは死す

春寒しピンクの布に巻く屍

窓開けばおやつ待つチロ無き余寒

さぬき

従姉妹どち幼な呼びして桃の郷

故里や摘みてたちまち木の芽和え

故里はお遍路の鈴あわあわと

朧夜や骨までしやぶる瀬戸の味

短夜やはらから集ふ郷言葉

老鶯に迎え送られ札所寺

仁王門くぐりて見上ぐ余花やさし

牡丹や余生つぎこむ花づくり

鵠沼

新背広卒業の子を見上げけり

祝背広就職といふ巣立かな

就職は別れの一つ鳥雲に

5 . 5 . 5 .
4 . 4 . 4 .
0 0 0

5 . 5 . 5 . 5 . 5 . 5 . 5 .
4 . 4 . 4 . 4 . 4 . 4 . 4 .
0 0 0 0 0 0 0 0 0

5 . 5 . 5 . 5 .
3 . 3 . 3 . 3 .
0 0 30 30

生駒

散華とも霊園しとど花吹雪

咲き競ひし源平桃も葉となりぬ

藤娘出そう藤房ととのへり

平成五年六月五日信州の旅

三代の旅信濃路を青葉風

大手まり真白湯の香の中にゆれ

まじり気のなきみどり嶺よ露天風呂

峯八分疲れは軽し藤の花

からみ合ひ花房乱る深山藤

高松敏夫宅にて

子に植えし桜桃熟るる少女有美

遍路憩ふ礎石千年語りつぐ

長野中野市北信総合病院入院 六月五日

点滴の紫班をさする梅雨の窓

明易すや退院といふ別れかな

濃紫陽花点滴の染みうすれゆく

$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 4 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

5
.
5
.
0

5
.
5
.
0

5
.
5
.
0

5
.
5
.
0

$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 5 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

5
.
5
.
0

5
.
5
.
0

$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 4 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 4 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

5
.
6
.
0

5
.
6
.
0

5
.
6
.
0

5	5	5		5	5	5	5		5		5	5
.
8	8	8		7	7	7	7		7		7	7
.
0	0	0		0	0	0	0		0		0	0

これはまあ皿をはみ出る初秋刀魚
倉裡裏の鬼灯赤し妻若し

井高野で

猫難の子雀放つ秋彼岸
雀獲りしかり猫抱く秋彼岸

鵠沼

映る影流るる音も水の秋
秋晴やいそいそ釣に碁敵と

秋晴や碁敵はまた釣がたき

釣りし沙魚はねる厨にはや碁音

雁渡る双手で握手する別れ

口釜へ増ゆる孫との日向ぼこ

柿送る案内電話の郷言葉

5	5
.	.
9	9
.	.
0	0

5	5
.	.
8	9
.	.
0	0

$$\begin{array}{cc} 5 & 5 \\ \cdot & \cdot \\ 10 & 10 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 5 \\ \cdot \\ 10 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

玉造保養ホーム

柳散る入日に染まる湖のほとり
五指ほぐすなだむ節おし今朝の秋

鵜沼

夜逃げとや閉ざせる窓に満月光
人恋ふかに垣越し延び来青き蔦

鵜沼

猫舌は母似亡母恋ふ湯豆腐鍋
物言はず一日留守居の師走呆け
冬日向売れぬ空地は猫のもの
カレンダーも庭も山茶花日々惜しむ
柚子ほめてつい佇ち話いただけり
留守居して米研ぐ窓に寒宵月
大晴れや蒲団干す家干せぬ家

湯河原保養ホーム

爪切りて指美しや賀状書く
吹き溜る枯葉の中の紅一葉

5 5
・ ・
12 12
・ ・
0 0

5 5 5 5 5 5 5
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
12 12 12 12 12 12 12
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0 0 0

5 5
・ ・
10 10
・ ・
0 0

5 5
・ ・
11 11
・ ・
0 0

大阪井高野

宵戎押さへ揉まれて娘はきげん

ただいまの娘の声弾む宵戎

初釜へ晴着見送る母も美し

はよ来ませ郷言うれし初電話

寒玉子盛りあがる黄身老もまた

武雄さん四十九日仏事列席

春寒やもう夢でしか逢へぬ人

鵜沼

頑張れよ愛犬館も初日さす

生駒

受験子に買ふ知恵袋文殊さま

鵜沼

春寒し起ち居いちいち声あげて

成城笹倉にて

中古車群旗はたはたと春を呼ぶ

6
・
2
・
0

6
・
2
・
0

6
・
1
・
16

6
・
1
・
0

6
・
1
・
9

6
・
0
・
0

6
・
1
・
0

6
・
1
・
0

6
・
1
・
0

6
・
1
・
0

猫柳活ける娘もまたつやつやし
花葉挿しふと京の友思ひけり

鶺鴒沼

再会や土を割り出る花芽たち
分葱和へおふくろ味の老自慢

大阪 生駒にて

名もゆかし若草豆腐のうすみどり
点心に一口ほどのたらの芽よ

鶺鴒沼

茄子胡瓜畑銀座と故里便り
額の花一人で居たき時もあり
夏帽子のぞく白髪も好しとして
夏帽子年齢をきかれて逆に問ひ

大阪

山梔子の真白につらき雨つづく
青葉風入れてもきれぬ愚痴話

6 . 6
6 . 6
0 . 0

6 . 6 . 6
6 . 6 . 6
0 . 0 . 0

6 . 6
3 . 3
0 . 0

6 . 6
3 . 3
0 . 0

6 . 6
2 . 2
0 . 0

言ひたきをたたむくちなし真白なる

国分

辻地蔵朝取りトマトにお眼細く

暑に耐える白前掛の辻地蔵

青田風通し一睡の浄土かな

喉走る名水冷えの心太

空暗し呼べば遠退く夕立雲

今日も亦他所夕立とそれにけり

花合歡や溪の音きく温泉の窓

含羞草いで湯泊りの老四人

国分

故里は金比羅歌舞伎花の山

岐れ道ミモザ盛りの島巡り

大阪

一言の棘のいたみや夏薊あざみ

一言の棘に猛暑の雲みあぐ

風鈴や窓辺に母と娘の笑顔

6
.
6
.
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
6
.
7
.
0
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 4 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

6
.
4
.
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 7 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

昼寝覚めまだ侍り猫伸びきつて

横浜中銀ライフケア 浜田さん宅に初めてお邪魔して

シルバーホーム笑ち会釈して廊下涼し

お元氣ねきれいに食べし夏料理

西瓜割漢につづく娘が果す

踊の輪みるみる三重に炭坑節

高階に眼覚めてわつと雲の峰

鵜沼

熱帯夜慣れて別れのなになう

朝涼や肩まで掛けてふと淋し

雲の峰息子は太平洋の空ならん

湯河原保養ホーム

満月や仰ぎし友はいま筑紫

月白やせり上り待つ大舞台

手折り来て芒挿しくれホーム友

鵜沼

6
・
7
・
0

6
・
8
・
0

6
・
0
・
0

6
・
0
・
0

6
・
8
・
0

6
・
8
・
0

6
・
9
・
0

6
・
9
・
0

$$\begin{array}{c} 6 \\ \cdot \\ 11 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

医と寺の娘が幼な友木の葉髪

秋風や札所の寺の大礎石

木犀匂ふ金銀並びし故里の庭

湯河原保養ホーム

着ぶくれて椅子のくぼみに孫自慢

ほほえみで答ふ遠耳冬すみれ

言ふだけを言ふてコートのを忘れ物

爪切りて指美しく賀状書く

保養所の握手の別れ紅葉散る

鵜沼

晩菊にそとさよならをしはし旅

物忘れめつきり増えて年の暮

晩菊の一本供花とし剪りにけり

補聴器を切りて一人の冬の夜

横浜中銀マンション

ほんのりと米寿の頬に屠蘇の紅

倅せは初夢もなき深眠り

7 7
・ ・
1 1
・ ・
0 0

6 6 6 6
・ ・ ・ ・
12 12 12 12
・ ・ ・ ・
0 0 0 0

6 6 6 6 6
・ ・ ・ ・ ・
12 12 12 12 12
・ ・ ・ ・ ・
0 0 0 0 0

6 6 6
・ ・ ・
11 11 11
・ ・ ・
0 0 0

住連飾りドアにかけて・
開かんと冬薔薇秘めし力かな

7 7
・ ・
1 1
・ ・
0 0

鵜沼の家

梅一輪いちりん日々を留守居して

7
・
2
・
0

倅せや日々の留守居に梅一輪

7
・
2
・
0

紅梅や白磁揃ひの朝餉の膳

7
・
2
・
0

話す日々米寿祝の冬ばらに

7
・
2
・
0

毛糸解く編み直されぬ過去てふもの

7
・
2
・
0

春寒し幼なに戻るおないどし

7
・
2
・
0

鵜沼

空地占め空の青吸ひ犬ふぐり
椀に浮くさみどりを吸い春一番
朝桜夢のあと追ふ思慕の人

7 7 7
・ ・ ・
3 3 3
・ ・ ・
0 0 0

雪柳白壁拒み闇寄せず

ワインの栓ぼんに拍手や夜はおぼろ

応えなく平寝落ちしよ花疲れ

兄弟が初鯉のぼり揚げにけり

母の日に娘二人の遠電話

$$\begin{array}{ccc} 7 & 7 & 7 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 3 & 3 & 3 \\ \cdot & \cdot & \cdot \\ 0 & 0 & 0 \end{array}$$

7
.
4
.
0

7
.
4
.
0

7
.
4
.
0

7
.
4
.
0

7
.
0
.
0

$$\begin{array}{c} 7 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

7
.
0
.
0

7
.
0
.
0

母の日や六・

岐れ道えらべば険し果の余花

試歩のばす思ひたがわず藤の花

絵タイルの道若やぎて地球の日

高きほど大揺れてをり夾竹桃

雑草の茂りたくまし子もたくまし

草いくさ陣地広げし青芒

葉を研ぎて陣地広げむ青芒

職退くも余生と言へぬ梅青し

娘名で忌の案内状梅雨じめり

村上久夫三年忌

7
.
0
.
0

7
.
0
.
0

$$7.00$$

7
.
0
.
0

$$7.00$$
$$7.00$$

7
.
0
.
0

$$7.00$$
$$7.00$$

7
.
0
.
0

海の風山の風入れ夏座敷

国分 勝美さんの家で

夕木槿汚れなき白閉じにけり

春秋を裾にひろげて讃岐富士

鵜沼の家で

はいはいと重ねてさびし含羞草

眠り草ねむらぬ葉あり反抗期

装ひし遠き日のあり薄衣

咲き満つもなほあわあわと花みずき

花水木乙女の恋の物語

国分の家で

故郷発つ朝採りトマト重すぎて

鵠沼

7
.
0
.
0

$$\begin{array}{cc} 7 & 7 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \\ \cdot & \cdot \\ 0 & 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 7 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$
$$\begin{array}{c} 7 \\ \cdot \\ 0 \\ \cdot \\ 0 \end{array}$$

7
.
0
.
0

$$7.00$$

7
.
0
.
0

7
.
7
.
0

傷つけしこと気付かずや青芒

やさしくも棘ある言葉夏薊

夏痩せを知らずに生きて米寿かな

掌中の珠とはこれよ白桃むく

無花果を鳥につつかれ犬叱る

新涼や又取り出して読む佳信

爽やかや返書のペンのよくすべり

鳥わたる返書に三色ボールペン

露けしや二人の友の新佛

千田裕之君結婚式列席のため大川二人に連れられて国分へ。
私は式後居残って国分で滞在

コスモスに手をふる急行待避駅

7
・
10
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
0
・
0

7
・
8
・
0

国分駅

秋夕焼こつくりさんの道標
こかけ池のこつくり道

出ぬ電話そうか今宵は月の句座
和子さんに電話

家の味継ぎて伝えて祭ずし
寿子さんのすし

貰ふなら遠慮はすまじ秋茄子
勝美さんの畑

大阪 奈良に行く

栗むくや消えぬ弟の国訛
故郷もつ倅せしかと柿をむく

鵜沼

文化の日遠き明治の今日生れ

7
・
11
・
0

7 7
・ ・
11 11
・ ・
0 0

7
・
10
・
0

7
・
10
・
0

7
・
10
・
0

7
・
10
・
0

透きとおる秋や少年ハーモニカ吹く
鰯雲告げたき人は遠く住み
鵜沼

いま倅障子をよぎる鳥の影
山茶花や豆腐屋を待つ留守居役
冬桜口紅うすくひく米寿
騙されてをれば事なし枯尾花
梅ヶ枝の終の一葉の散る別れ

平成八年と九年の原本を喪失した。句だけはのこっていたので Ⅲ に載せてある。

7	7	7	7	7	7	7
・	・	・	・	・	・	・
12	12	12	12	12	11	11
・	・	・	・	・	・	・
0	0	0	0	0	0	0

第4章 母お気に入り句

端居して出世無縁の長寿眉

199607

この句は四国の故郷で読む故郷は香川県高松市国分 で、従弟の村上勝美宅を宿としていた。そこで村上勝美氏の眉を読んだ句。京鹿子の特選賞となり、数ページの誉め言葉があった。端居の季語は夏である。

初入日三六六の一を呑み 199601

三六六は閏年からくる。1996年は閏年だった。ひねった句。

朧夜や骨までしゃぶる瀬戸の味 19930400

四国高松で従弟の村上久夫さんに 鯛の兜煮 をご馳走になった。骨までしゃぶる は京鹿子の海道主宰から手紙で「骨までしゃぶる 全く感心いたしました 故郷はよいもの 良」と。故郷のあるものは倅ですね と

啓室やシルバーホームの預け解け 1997/03

1997年2月に。私と喜美子と清子さんの3人で ドイツ デュッセルドルフの郷生のマンションに10日間泊った。その間 母を湘南台の老人ホームに預けた。その帰国が丁度〰月上旬だったので。

春暁の正夢なれや初ひ孫 1997/03

清子さんが千里を懐妊したとの知らせをめでて。

あとがき

母は句集の出版を望んでいなかったのですが、横山実習室に放置したままだったが、

<http://www.geocities.jp/takefumi1604/index.html>

横山実習室へはいまでも「横山実習室 検索」で入れるがヒットしたのには私の身辺整理に一環として このノートの添え書き部分も 「EXファイル」にしてみた。 鶴沼 句日記執筆がヒットしたのには驚いた。 かつては「イッ」で検索すると「大月夜唐招提寺の庭にイッ」平成三十年四月から始めて 3ヶ月 かかった この本を印刷するつもりはないが、pdf で配布できるようにしたのが私の役目だった 1000句のなかで 母おきにいりの句を 第3章にまとめてみた。 そのなかで

端居して出世無縁の長寿眉

を代表作としたい。

平成三十年七月

吉川竹四郎

あとがき2

母 吉川ふみ子のメモランダム

ついにくるべき日がきました。年に不満はないというかもしれませんが、昨日の別れは残念でした。享年90才でした。リウマチで手足の痛さに苦しんでいた2年でしたが、10月6日クモ膜下出血で一瞬にして昏睡状態に陥り死の苦しみは望みどおりになりました。

私と母とのつきあいは61年で、私の知らない母の前半生を私に話してくれるかたもわずかになりました。

母は大川清 きくゑの長女として、名古屋で生まれました。清が医学生で、名古屋で住んでいたのです。しかし香川県綾歌郡端岡村国分で医者 of 長女として育ち、延子、貞子、清一、一善と続きます。一善叔父とは19も離れているから親のような姉でしょう。高松の県女から京都女専に進みます。清は医者 of 養子を母に期待したのと、縁遠うかったのとで、27までハイカラ生活をしていました。わたしに麻雀や花札を教えたのもそのころの生活のせいでしょう。

父吉川太三郎との結婚は昭和9年、私の誕生は昭和11年1月、太三郎没が11年9月8日ですから、2年間の結婚生活でした。淀の水女学校と此花商業の私学を経営する父との結婚は1回の見合いで決めたやけくそ気分だったようです。太三郎の父竹三郎、妻いと、百合子（14才）、聖子、不二子、正三、武雄、千代造、綾子、の在所帯のきりもりが始まるのはあの性格のせいでしょう。この舞台が大阪の長柄です。戦争中の昭和19年に強制疎開で、

相川に移ります。その頃第一善、従兄弟の一幸さんが下宿していました。

売り喰い生活も底をつき昭和25年、相川文具点を始めます。最初はお茶と文具でした。文具には丸亀の田岡屋が参考になった。その前に終戦で戦地から帰ってきた叔父たちと吉川製釘所をいまの新大阪駅の真下で始めますが、失敗します。

正三、武雄、千代造、綾子、百合子、聖子、不二子の内武雄は恋愛でしたが他はすべて見合いでその取り仕切りはプロ級です。

私竹四郎の扱いは特別でした。四国からの女中さんを付けたり、甲南中学へ通わせ、大学時の京都に下宿させるなどなど。私への期待が大きかったのは、私にとってはプレッシャーでしたが、高校2年の時に発病した肺結核の病弱であきらめもあったようです。卒業後は大学の先生にも考えましたが、薬の進歩で元気になり就職することになり、日本初のコンピュータ（東京の三菱原子力）に決まり、昭和37年に上京する時は時自分の行動範囲が増えると言って反対しませんでした。細井さん、青山さん、和彦さんらの店の人たちとの生活は34年頃から始まります。

相川の家の場合、水無瀬のマンションの売買、土地の切り売り等の不動産の売買時の慎重な判断はまわりから親分扱いされたようです。

ここ藤沢に私達が移ったのは昭和62年秋、母は水無瀬をたんで63年に、この部屋で暮らします。友達がおおく、女学校のクラスメート、女専のクラスメート、成蹊短大の生徒さん、店の文具関係、僕の友達（私とは音信不通）、親類付き合いなど年賀状、冠婚葬祭の贈答の律儀さは明治女です。最後に浄土真宗の信心は俳句と並んで特筆に値します。この母が極楽にいつていないはずは有りません。希望どうりに長柄のお墓に60年遅れで太三郎の横に寝かしてあげます。

合掌